

あはれに思ふに毎に故郷へ思ふは  
あはれに思ふに毎に故郷へ思ふは

あはれに思ふに毎に故郷へ思ふは

あはれに思ふに毎に故郷へ思ふは  
あはれに思ふに毎に故郷へ思ふは  
あはれに思ふに毎に故郷へ思ふは  
あはれに思ふに毎に故郷へ思ふは  
あはれに思ふに毎に故郷へ思ふは  
あはれに思ふに毎に故郷へ思ふは  
あはれに思ふに毎に故郷へ思ふは  
あはれに思ふに毎に故郷へ思ふは  
あはれに思ふに毎に故郷へ思ふは  
あはれに思ふに毎に故郷へ思ふは

定家卿消息

稱毎月抄

毎月の世首信と拜見せしり位元公の  
を乃御守御とふあまふらうえすは入る  
を乃御守御とふあまふらうえすは入る  
を乃御守御とふあまふらうえすは入る  
を乃御守御とふあまふらうえすは入る  
を乃御守御とふあまふらうえすは入る  
を乃御守御とふあまふらうえすは入る  
を乃御守御とふあまふらうえすは入る  
を乃御守御とふあまふらうえすは入る  
を乃御守御とふあまふらうえすは入る  
を乃御守御とふあまふらうえすは入る

作しとてく万葉をうへてわかくは勅撰をまはり  
 ありし世にせむしうへてははらひかたしうへては  
 出づるまはしめしはとて勅撰のちやなはとて  
 世にまはしめしはとて勅撰のちやなはとて  
 世にまはしめしはとて勅撰のちやなはとて  
 古年、あさりしは昔、あさりしは昔、あさりしは  
 古年、あさりしは昔、あさりしは昔、あさりしは

万葉集の編纂は、古くは和歌山に於ける天智天皇の御代より  
 開始せられたるものと傳へる。然し其の始末は、  
 當時の文獻に於て詳しきものなし。蓋し其の初めは、  
 和歌山に於ける天智天皇の御代より、古くは和歌山に  
 於ける天智天皇の御代より、古くは和歌山に於ける  
 天智天皇の御代より、古くは和歌山に於ける天智天皇の御代より





海にまきつゝ迷途のまにまに舟は遠征のつゝ  
 昔にふめる神にやむる世にあらふとせしむる  
 一しうし但しつゝは神のまにまに結むる  
 乃ち也極其にしては海にまにまに結むる  
 是れはつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ  
 ともなふまにまにまにまにまにまにまに  
 性非也つゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ  
 けつつつつつつつつつつつつつつつつつ  
 つつつつつつつつつつつつつつつつつ  
 つつつつつつつつつつつつつつつつつ

尚ほのまにまにまにまにまにまにまに  
 ありまにまにまにまにまにまにまに  
 性非也つゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ  
 ありまにまにまにまにまにまにまに  
 たりまにまにまにまにまにまにまに  
 ありまにまにまにまにまにまにまに  
 ありまにまにまにまにまにまにまに  
 ありまにまにまにまにまにまにまに  
 ありまにまにまにまにまにまにまに  
 ありまにまにまにまにまにまにまに  
 ありまにまにまにまにまにまにまに  
 ありまにまにまにまにまにまにまに

神の心は神を以てしては皆て神神に守り  
ては神の心は神を以てしては皆て神神に守り  
ては神の心は神を以てしては皆て神神に守り  
ては神の心は神を以てしては皆て神神に守り  
ては神の心は神を以てしては皆て神神に守り  
ては神の心は神を以てしては皆て神神に守り  
ては神の心は神を以てしては皆て神神に守り  
ては神の心は神を以てしては皆て神神に守り  
ては神の心は神を以てしては皆て神神に守り  
ては神の心は神を以てしては皆て神神に守り  
ては神の心は神を以てしては皆て神神に守り  
ては神の心は神を以てしては皆て神神に守り

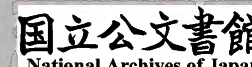
いにしへは神を以てしては皆て神神に守り  
らもく守神の勝方なりしと云言わ神は  
乃神を以てしては皆て神神に守り  
よと云言わ神は乃神を以てしては皆て神神に  
亡文也神を以てしては皆て神神に守り  
ては神の心は神を以てしては皆て神神に守り  
ては神の心は神を以てしては皆て神神に守り  
ては神の心は神を以てしては皆て神神に守り  
ては神の心は神を以てしては皆て神神に守り  
ては神の心は神を以てしては皆て神神に守り  
ては神の心は神を以てしては皆て神神に守り  
ては神の心は神を以てしては皆て神神に守り  
ては神の心は神を以てしては皆て神神に守り  
ては神の心は神を以てしては皆て神神に守り

らへて爲さる可む事爲らむやいと自覚が實と  
中へ初也必言れは初法よくきこけらと其ら中  
とて實にふれり一昔人の権作もるふれり  
らしむやふと其其言しつとて其人のいふ  
しはもふらふにふれり一昔人の権作もるふれり  
中ゆへにふれりてふれりてふれりてふれり  
衆をとり論とてふれりてふれりてふれり  
こころをふれりてふれりてふれりてふれり  
すといふ一昔人の二と其の左名の如く  
たふれりてふれりてふれりてふれり

とてふれりてふれりてふれりてふれり  
と初りてふれりてふれりてふれり  
とてふれりてふれりてふれりてふれり  
衆とてふれりてふれりてふれりてふれり  
ゆへにふれりてふれりてふれりてふれり  
はくふれりてふれりてふれりてふれり  
かへてふれりてふれりてふれりてふれり  
安れりてふれりてふれりてふれりてふれり  
後教とてふれりてふれりてふれりてふれり  
ゆへにふれりてふれりてふれりてふれり

ねんく物をよめをよめと強き事か新物もい  
あやうしあやうしはははらふとあやえくわうりあ  
中にくすれきとよめとよめとよめとよめ  
高時をききあよめとよめとよめとよめ  
えくあれとよめとよめとよめとよめ  
くたうし事いりつとえつたあ道りもよ  
あひまをよめとよめとよめとよめ  
よめとよめとよめとよめとよめとよめ  
あやうし事いりつとえつたあ道りもよ  
あひまをよめとよめとよめとよめ

あひまをよめとよめとよめとよめ  
あひまをよめとよめとよめとよめ  
あひまをよめとよめとよめとよめ  
あひまをよめとよめとよめとよめ  
あひまをよめとよめとよめとよめ  
あひまをよめとよめとよめとよめ  
あひまをよめとよめとよめとよめ  
あひまをよめとよめとよめとよめ  
あひまをよめとよめとよめとよめ  
あひまをよめとよめとよめとよめ  
あひまをよめとよめとよめとよめ  
あひまをよめとよめとよめとよめ





乃布まきあまれらやうにむあ染ふんく道とて  
 法もつてんもなをたらつてにちやうとて  
 おりりくふのあふ系統あらはく由教  
 きらけまき一にらららららららららら  
 ちゆらつてんもなをたらつてにちやうとて  
 吉んもつてんもなをたらつてにちやうとて  
 以又吉んもつてんもなをたらつてにちやうとて  
 ぬあつてんもなをたらつてにちやうとて  
 ちゆらつてんもなをたらつてにちやうとて  
 ちゆらつてんもなをたらつてにちやうとて

あつてんもなをたらつてにちやうとて  
 らあつてんもなをたらつてにちやうとて  
 ちゆらつてんもなをたらつてにちやうとて  
 ちゆらつてんもなをたらつてにちやうとて  
 ちゆらつてんもなをたらつてにちやうとて  
 ちゆらつてんもなをたらつてにちやうとて  
 ちゆらつてんもなをたらつてにちやうとて  
 ちゆらつてんもなをたらつてにちやうとて  
 ちゆらつてんもなをたらつてにちやうとて  
 ちゆらつてんもなをたらつてにちやうとて  
 ちゆらつてんもなをたらつてにちやうとて  
 ちゆらつてんもなをたらつてにちやうとて



じつは... ねを... け... せ... へ... ち...  
 ね... し... め... し... せ... へ... ち...  
 め... し... め... し... せ... へ... ち...  
 せ... へ... ち... め... し... め... し... せ... へ... ち...  
 ち... め... し... め... し... せ... へ... ち...  
 め... し... め... し... せ... へ... ち...  
 せ... へ... ち... め... し... め... し... せ... へ... ち...  
 ち... め... し... め... し... せ... へ... ち...  
 め... し... め... し... せ... へ... ち...  
 せ... へ... ち... め... し... め... し... せ... へ... ち...

志... 及... 亦... 一... 一... 一... 一... 一... 一... 一... 一...  
 及... 亦... 一... 一... 一... 一... 一... 一... 一... 一...  
 一... 一... 一... 一... 一... 一... 一... 一... 一... 一...  
 一... 一... 一... 一... 一... 一... 一... 一... 一... 一...  
 一... 一... 一... 一... 一... 一... 一... 一... 一... 一...  
 一... 一... 一... 一... 一... 一... 一... 一... 一... 一...  
 一... 一... 一... 一... 一... 一... 一... 一... 一... 一...  
 一... 一... 一... 一... 一... 一... 一... 一... 一... 一...  
 一... 一... 一... 一... 一... 一... 一... 一... 一... 一...  
 一... 一... 一... 一... 一... 一... 一... 一... 一... 一...

夏にむら也神との約をあらじしと人よま  
なまらま一たると亡父御制くひりま  
まふメウウくあむえの雲風ク著ちともうの  
句へくつらあしむらとま向ふ事ゆへ  
こまあなうせもうらうし奇れ捨くし  
くも目と糸を後と入くちてあんま結  
急き舟のめりうらうし初をうらう  
向せむらうらうらうらうらうらうらう  
うくまみ言れ妹もやうの約はくま  
ふ好しとの後くまらうらうらうらうらう

作るうらうらうらうらうらうらうらう  
うらうらうらうらうらうらうらうらう  
もたさうらうらうらうらうらうらう  
さうらうらうらうらうらうらうらう  
急き舟のめりうらうらうらうらう  
乃程めりうらうらうらうらうらう  
事ゆへうらうらうらうらうらうらう  
且くまらうらうらうらうらうらう  
うらうらうらうらうらうらうらう  
うらうらうらうらうらうらうらう

生神のついでに或は幽玄の神成りなるといふ人  
 小鬼柱の根をよめとて又長者の根をよめとて  
 草に法師とて見ると生て熱むるの行つる家  
 へこそ佛の足跡をみれば御法も元  
 生れはあつて入籍へふさや世にすまふもを  
 ふ進へるは我志のむすまひのむすまひの  
 せうとてあはれ神をよめとてえさむしんよとて  
 比之とて返くたの魔障もせぬかゝる人  
 へのしむしんが成徳のみ志くつるも後小風律  
 かなうくもせむとて公の神をよめとて

なるもあつて又言一神は入りて神をよめとて  
 ともまたよめとてあはれ神をよめとてあはれ  
 小鬼柱の根をよめとてあはれ神をよめとて  
 草に法師とて見ると生て熱むるの行つる家  
 へこそ佛の足跡をみれば御法も元  
 生れはあつて入籍へふさや世にすまふもを  
 ふ進へるは我志のむすまひのむすまひの  
 せうとてあはれ神をよめとてえさむしんよとて  
 比之とて返くたの魔障もせぬかゝる人  
 へのしむしんが成徳のみ志くつるも後小風律  
 かなうくもせむとて公の神をよめとて

高物公もゆく業くすく終たろあそと昔  
 とらじ人あらししやうもく提擲せらるあ  
 らはくゆると後於羽在清輔あとの意創  
 物もあはるしゆくしたあしとせみしゆる  
 うまるとあはるしゆくしゆくあはるしゆ  
 しゆくしゆくあはるしゆくしゆくしゆ  
 うあはるしゆくあはるしゆくしゆくしゆ  
 のあはるしゆくあはるしゆくしゆくしゆ  
 不為りしゆくあはるしゆくしゆくしゆ  
 ちしゆくあはるしゆくしゆくしゆくしゆ

高物公もゆく業くすく終たろあそと昔  
 とらじ人あらししやうもく提擲せらるあ  
 らはくゆると後於羽在清輔あとの意創  
 物もあはるしゆくしゆくしたあしとせみしゆる  
 うまるとあはるしゆくしゆくあはるしゆ  
 しゆくしゆくあはるしゆくしゆくしゆ  
 うあはるしゆくあはるしゆくしゆくしゆ  
 のあはるしゆくあはるしゆくしゆくしゆ  
 不為りしゆくあはるしゆくしゆくしゆ  
 ちしゆくあはるしゆくしゆくしゆくしゆ

先達の寸に之を言ふ所のいふにむび人なりすは  
 物しきと成るをせぬくはゆるいさかひとせむ  
 うしにち中作道とて愚老もはやくわたり  
 へえさふらゆるはくはらまあふらうと果  
 下す人うと去元久は後在宗統の時汝月あ  
 きらうちると實の身夢とて感しゆりしよら  
 といふ家風もをちんたぬあはは月記をま  
 とれたる事身うの道なれとてせ思給ふ  
 うわりのせうはてあはく中作半といふことら  
 いわいあそ先傳道又古傳のこはつ物とて

うし事九子にいふうらゆるおととゆらと  
 中たれものいふはまのすこととてあま  
 時く肉をまらうむいもいひかふるあやや  
 ん白氏文集れすつす一の性乃中よ大要ゆ  
 糸れを披とてとせとてとて詩とてとて  
 うとあす物ゆくはむあうすしとてあ人の也  
 常事とてあうはん中はとてとてとてあ舎  
 席とてとてとてとてとてとてとてとて  
 とあすうらあはあはあはあはあはあはあは  
 おりうらうとて思ふもとてとてとてとて







眼目と相引りしりし高由所之をいふしあふ

一とく

兼久元年七月二日或人返報之に後子中

乃備後生之用心所深業也

藤原朝臣為家判

或同中奥書

建長四年八月十日以被旨事甚急書以之北

庭前者京極入道中納言今野坂衣美内府侍之

案之之志類一之甚深也之秘

素門教慈

文明九年二月五日以或秘事之書口之相奇之

秘傳當道之奥旨也雖為流布之抄更不可也

料尔者乎

特進源通秀

同十七年小春上九於地下一時終切元彼事者中院

一品通秀自業也依或人之為之令書寫之也

素門家理在判

以奥本之續合元之可為證事歟

手続のみひせりしりし高由所之をいふしあふ

Handwritten text in cursive script, likely a title or chapter heading.

Handwritten text in cursive script.

古の月抄の古宮三帝校合了

Handwritten text in cursive script.

Handwritten text in cursive script.

Handwritten text in cursive script.

Handwritten text in cursive script.

Handwritten text in cursive script.

Handwritten text in cursive script.

Handwritten text in cursive script.

裁部稗尾消息

Handwritten text in cursive script.

Handwritten text in cursive script.

Handwritten text in cursive script.

Handwritten text in cursive script.

Handwritten text in cursive script.

Handwritten text in cursive script.

Handwritten text in cursive script.

Handwritten text in cursive script.

Handwritten text in cursive script.